



Title	英語の軽動詞構文：主動詞がgiveとmakeの場合についての試論
Author(s)	由本, 陽子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 79-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76971
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

由本陽子

1. はじめに

英語では、give, make, have, takeなどを主動詞とし、動詞からの派生名詞（以後ゼロ派生名詞、すなわち転換名詞も含む）を直接目的語とする(1a)(2a)(3a)のような文が頻繁に使用される。これらは、それぞれ(1b)(2b)(3b)のような単一の動詞による文にパラフレーズできることからわかるように、意味の中心は派生名詞が担っており、主動詞 give, make, have の表す意味は軽くなっていることから、しばしば「軽動詞構文(light verb construction)」(Jespersen 1909-49)と呼ばれる。¹

- | | |
|--|---------------------------------------|
| (1) a. The mother gave her child a kiss. | b. The mother kissed her child. |
| (2) a. Harry made an offer of money to the police. | b. Harry offered money to the police. |
| (3) a. John had a swim in Pam's new pool. | b. John swam in Pam's new pool. |

(Cattell 1984)

軽動詞構文の分析において解明すべき第1の問題は、giveのように主動詞が現れ得る構文のタイプが複数ある場合(cf. (4)), (5)(6)(7)に示すように、目的語として現れる派生名詞の性質によってどのタイプの構文になるかが異なる理由の解明である。

- | | |
|---|-------------------------|
| (4) a. John gave a book to Mary. | |
| b. John gave her a book. | |
| c. Cows give milk. | |
| (5) a. Harry gave a demonstration of the new technique to the students. | |
| b. Harry gave the students the demonstration of the new technique. | |
| (6) a. ?? The mother gave a kiss to the child. | |
| b. The mother gave her child a kiss. | |
| c. *Sarah gave a stir to the soup | |
| d. Sarah gave the soup a stir. | |
| (7) a. *John gave a shudder to her. | |
| b. *John gave her a shudder. | c. John gave a shudder. |

*本論文は2019年度および2020年度科学研究費基盤研究(B)(#17H02334)の助成を受けて行った研究成果の一部である。草案の段階で共同研究者である伊藤たかね氏、杉岡洋子氏、から貴重なコメントをいただいた。同僚のNancy Lee氏にはインフォーマントとしてお世話になった。ここに記して感謝申し上げたい。

¹一見同じ構文に見えても、Sue made a gesture of irritation.のような文は、*Sue gestured irritation.(Cattell 1984:16)のようにパラフレーズできないことから、軽動詞構文とは見なさない。

本稿では、この問題を扱うには、主動詞と派生名詞両方の項構造のみならず意味構造の合成による原理的な説明が妥当だと考える。

さらに、主動詞によっても、軽動詞として機能し得る構文のタイプが異なるという厄介な問題もある。たとえば、give 軽動詞構文は、(6b)(6d)のように派生名詞のものと動詞が二重目的語構文をとらない場合でも間接目的語をとるのに対して、make 軽動詞構文が二重目的語構文になるのは、派生名詞のものと動詞も二重目的語構文を作ることができる場合に限られていることが、Cattell (1984)によって指摘されている。Cattell (1984)では、make は二重目的語構文をとる動詞と見なしていないが、岸本 (2001)では、make は for-与格交替をする二重目的語構文を作る動詞の代表的なものとされている。なぜ、同じ二重目的語構文を作る動詞でありながら、give と make とでは、このような違いがあるのだろうか。

(8) a. Harry made an offer of money to the police.

b. Harry made the police an offer of money

c. Harry offered the police the money.

(Cattell 1984: 44-45)

(9) a. Sylvia made a confession to her father.

b. *Sylvia made her father a confession.

(10) a. Sylvia confessed her misdemeanour to her father.

b. *Sylvia confessed her father her misdemeanour.

(Cattell 1984: 64)

軽動詞構文についての先行研究の大半は、それぞれの構文の特徴を記述するレベルに留まるものであった。構文文法理論が確立して後の研究においても、たとえば give ...a N のような形で軽動詞構文を個々に認め、それぞれについて共起し得る N の制約や意味について記述するといった分析がほとんどで、軽動詞構文の一般的本質を明らかにするものとは言えない。²軽動詞構文を一般的な統語的規則に従って派生し、主動詞と派生名詞の項構造が融合された複雑述語(complex predicate)を含む文として分析しようとする研究もあるが、主動詞によって派生名詞の項の現れ方には差異があり、その一般原理を見出すところまで至ってはいない。たとえば、Cattell(1984)も、そのような生成文法的アプローチで広範囲のデータを扱った、数少ない総括的な軽動詞構文研究であるが、彼のアプローチには理論的に重大な問題がある。詳細には立ち入れないが、彼の分析では、軽動詞構文の構造に対して、主動詞と派生名詞の項構造と下位範疇化素性³とを並列的に語彙規則に照らしながら文中の項の θ 役割が付与される。彼の分析は、GB 理論に基づいているのだが、構築された統語構造を基盤としていわば項構造の合成とも言える操作をしていることになる。レキシコンと統語論とを区別する生成文法理論において、どのようにこの操作が位置づけられるのか不明である。少なくとも、主動詞と派生名詞が併合した段階でどのタイプの軽動詞構文が作られるかが決定できるようなメカニズムでなければならない。

本稿では、上で見た give 軽動詞構文と make 軽動詞構文の違いが何に起因するのかを考察

² 天川(2000)などを参照されたい。

³ Cattell (1984)では、 θ 役割と GF と呼ばれている。

しながら、軽動詞構文における主動詞と派生名詞の項の現れ方を説明するには、主動詞と派生名詞との意味合成メカニズムを明らかにすることが有効な分析法であることを示すことをめざす。軽動詞構文がどのような構造をとるかは、主動詞の性質が優先され決定されているが、上で見たように、直接目的語として現れる派生名詞の項構造や LCS といった語彙的性質による影響も要因となっていることは明らかである。このような現象を扱うには、Jackendoff (1990)が提唱している、意味構造と統語構造とが並行してそれぞれ自律的に構築され、対応規則によって適切な関係付けがなされることを可能にする文法モデルが最適である。本稿はこの文法モデルを想定し、意味構造の構築はあくまでも構成的な(compositional)合成によってなされるという仮定のもとに分析を進めていく。本稿の構成は以下の通りである。まずは、2 節で give 軽動詞構文と make 軽動詞構文の違いを整理する。3 節では、give 軽動詞構文について由本 (準備中)が提案した分析を基盤として、主動詞が give と make の軽動詞構文における派生名詞の項の現れ方の違いを説明することを試みる。4 節ではまとめと今後の課題を述べる。

2. Give 軽動詞構文と Make 軽動詞構文

Cattell (1984)では、それぞれが主動詞となって軽動詞構文を作る場合、直接目的語として表される派生名詞として以下のようなものが挙げられている。これらは、現れる構文のタイプ別に分類されている。

(11) GIVE

- (a) bark, belch, chuckle, cough, cry, gasp, growl, hiccup, howl, moan, shiver, quiver, shudder, sigh, sneeze, sniff, squeal, twitch, yawn, etc.
- (b) demonstration, description, explanation, illustration, indication, performance, portrayal, rendition, etc.
- (c) bash, biff, crack, hit, hug, kick, kiss, pat, pinch, punch, push, squeeze, etc.

(12) MAKE

- (a) appeal, approach, attempt, boast, bow, dash, grab, guess, leap, lunge, move, protest, remark, request, start, try, turn, appearance, flight, etc.
- (b) addition, analysis, announcement, appointment, confession, contribution, donation, estimate, gift, inspection, offer, presentation, promise, search, etc.

(11a) (12a)は自動詞を基体とする派生名詞で以下のような軽動詞構文に現れる。

(13) a. Bill gave a cough.

b. John made a flight to Europe.

(11b) (12b)は他動詞を基体とする派生名詞で軽動詞構文においては、以下のように基体動詞の項が前置詞句で表される。この項の一つは、(15)のように前置詞句ではなく間接目的語として表される場合もある。

(14) a. Harry gave a demonstration of the new technique to the students.

b. Harry made an offer of money to the police.

(15) a. Harry gave the students a demonstration of the new technique. (Cattell 1984: 39)

b. Harry made the police an offer of money. (Cattell 1984: 31)

(11c)は give 軽動詞構文に特異なタイプで (Cattell 1984: 7)、派生名詞単独の場合は項を表さず、(16a)のような前置詞句をとる軽動詞構文には現れないが、(16b)のように二重目的と構文に現れ、間接目的語として基体動詞の目的語を表すことができるものである。

(16) a. *Bill gave a kick of the dog. (cf. *a kick of the dog) b. Bill gave the dog a kick.

以上のデータからいくつかの問題が浮かび上がる。まず、派生名詞の形態と軽動詞構文の関係である。(11)(12)のリストを見ると、(a)のタイプのほとんどがゼロ派生名詞(転換名詞)であることに気付くが、例外もあり、基体動詞と派生名詞の形態、あるいは派生名詞の形態とそれが現れる軽動詞構文との関係を一般化することは難しい。先行研究では、Rooper (1987)のようにゼロ派生名詞は一般に基体の項構造を受け継がないとする観察もあり、軽動詞構文の分析においては、検討の価値がある問題ではあるが、本稿ではこの問題には立ち入らない。

第2の問題は、前節で触れた give 軽動詞構文において可能な(16b)の構文が(17)に示すようになぜ make では作られないのかという問題である。1節でも述べたように、Cattell (1984)は、make を二重目的語構文を作る動詞として認めていないが、⁴(18)のように give と同様与格構文から二重目的語構文への交替は可能であるにもかかわらずである。

(17) a. John made a grab at a bag.

b. *John made a bag a grab.

(18) a. John made a model plane for his son.

b. John made his son a model plane.

(岸本 2001: 137)

ここで注意したいのは、(16b)における間接目的語は、基体動詞の対象(Theme)にあたる項であるということである。(15b)に示すように、make 軽動詞構文も二重目的語構文になることはあるが、対象にあたる項を間接目的語として表すことはできないのである。この違いは何に起因するのだろうか。

これと関連する第3の問題は、make 軽動詞構文において、(15b)のように二重目的語構文が許されるのがどのような場合であるのかについて、1節で触れた Cattell による観察をいかに説明するかである。さらに、第4の問題は、(14)のように派生名詞の項が前置詞句で表される場合、これは主動詞の項として表されているのか、それとも、派生名詞の項として名詞句内に留まっているものなのかという疑問である。もし前者だとすれば、(14b)において make は本来下位範疇化しない to 句をとっていることになる。第2から第4の問題は、いずれも軽動詞構文における主動詞と派生名詞の項の具現化の仕組みに帰せられるものと考えられる。そこで、次節では、軽動詞構文における項の具現化という観点から、これらの問題の解明を試みる。

⁴ Cattell (1984: 55)では、make の語彙項目エントリーには一項動詞としての記述しかない。

3. 軽動詞構文における主動詞と派生名詞の項の具現化

由本(準備中)では、派生名詞と *give* とがどのように意味合成されるかによって、それぞれの項の具現形式が決定されることを示した。まず、Jackendoff (1990)に従い与格構文における *give* の LCS は (19a)、二重目的語構文における LCS は(19b)というように異なるものと考ええる。⁵

$$\begin{aligned}
 (19) \text{ a. give1: } & \left[\begin{array}{l} [x_i \text{ ACT ON } y_j] \text{ CAUSE } [\text{GO}_{\text{Poss}} [y_j, [\text{Path } [\text{TO } z]_k]] \\ \text{AFF } [x_i] \end{array} \right] \\
 & \Rightarrow x \text{ give } y \text{ to } z \\
 \text{b. give2: } & \left[\begin{array}{l} [x_i \text{ ACT ON } y_j] \text{ CAUSE } [\text{GO}_{\text{Poss}} [y_j, [\text{Path } \text{TO } z_k]] \\ \text{AFF } [x_i, z_j] \end{array} \right] \\
 & \Rightarrow x \text{ give } z \text{ } y
 \end{aligned}$$

AFF は Actor と Patient の関係性を表す関数であり、AFF が 2 つの項をとる場合は、両者の間に Actor-Patient の関係が成立していることを表す。二重目的語構文を作る場合にのみ、*give* には、対象物の着点への所有権移動の含意が保証されると言われる。これは言い換えると、二重目的語構文における間接目的語には必ず何らかの影響が認められるということである。たとえば、*give* と同じ 2 つの構文を作ることができる *teach* について、*She taught him English.* では彼が英語を習得したことが含意されるのに対して、*She taught English to him.* ではそのような含意がないとされる事実はこの証拠となる。(19)では、Action Tier によってこの違いが示されている。(19a)では、AFF が 1 つの項しかとらず、これは、与格構文が所有権の移動のみを表していることを示しているのである。

2 節で見た *give* に特有の(16b)のタイプの軽動詞構文において、どのように意味合成が起こるかを見てみよう。まず、*kiss* のような働きかけ動詞からの派生名詞の LCS は(20a)のように表される。⁶この転換名詞 *kiss* は先述の通り項構造は受け継がないが、LCS は基体動詞から受け継いでいると考えられる。由本(準備中)では、主動詞と派生名詞の意味合成は、派生名詞の LCS が主動詞の項に代入されることによる(Argument Substitution)と仮定し、LCS 内の Action Tier が主動詞の Action Tier と一致していないと項の具現において問題が生じるため、⁷ (20a)の LCS は(19a)ではなく(19b)の *y* の位置に代入されると説明している。その結果導かれる LCS が(20b)で、*x* が *z* に「接吻する」という行為をしかける」という意味を表し、*x* が *z* に何らかの影響を与えたという含意が生じることを Action Tier によって表して

⁵ 大筋は Jackendoff (1990: 267)に従っているが、影山・由本(1997)流の表記に変えたものである。また本来 Path の中には Source を表す[FROM *x*]も含まれるべきであるが、ここでは省略している。

⁶ 動詞を基体として派生した名詞は基体動詞と同じ LCS を受け継いでいると仮定しておく。ただし、派生名詞の中には本文でも述べているように項構造を受け継がないものもあるので、項構造と対応するものと考えられている動詞の LCS とは異なる位置づけが必要となる。この問題について本稿では立ち入らない。

⁷ 項の具現においては下段の Action Tier における項の役割が優先的に用いられると考えられている。(cf. Jackendoff 1990: 261)

いる。⁸これは、基体動詞とほぼ同じ意味を表す適切な意味構造であり、かつ、項の現れ方についても正しく予測するものとなっている。

(20) a. kiss : $\left[\begin{array}{l} [x \text{ ACT ON } y] \\ \text{AFF } [x, y] \end{array} \right]$

b. give [her child]_k [a kiss]_j :

$\left[\begin{array}{l} [x_i \text{ ACT ON } [x_i \text{ ACT ON } z_k]_j] \text{ CAUSE } [\text{GO } [x_i \text{ ACT ON } z_k]_j [\text{Path TO } z_k]] \\ \text{AFF } [x_i, z_k] \end{array} \right]$

ここで提案する分析では、軽動詞構文においても統語的な主動詞は軽動詞 *give* であるとする考え方から、*give* の LCS を基本として「構成的な (compositional)」意味の合成が想定されている点に注意されたい。ただし、「軽動詞」としての用法であることから、意味場を示す Poss (所有権に関わる意味場) は消失している。^{9,10}

以上のような由本(準備中)の分析に従えば、2 節で指摘した 3 つの疑問についても自然な説明が可能である。まず、*make* と *give* による二重目的語構文の違いについて詳しく見ておこう。表面上現れる大きな違いは、与格交替をした場合、*make* がとる間接目的語は *for* 句として現れるということである。これは、間接目的語となる名詞句の意味役割が *give* とは異なることを示している。

(21) a. Sue made a new suit for Harry.

b. Sue made Harry a new suit.

また、Jackendoff (1990: 194-196)によれば、同じ二重目的語構文でも *make* など *for* 句をとるタイプの場合は必ずしも直接目的語が相手に所有されることを意味しないという。そもそも、*Enrico sang Helen a song.* という文において、*Helen* が歌を所有するとは言えないのだし、さらに、*Enrico sang Helen a song, but she wasn't listening.* という文が容認されることからわかるように、相手が実際受益者になっていない可能性もあるという。つまり、正確には、二重目的語構文における *make* の間接目的語は、「受益者として意図されている人」ということになる。これは、*give* による二重目的語構文の場合とは大きく異なっている。先述のように、*give* の場合主語と間接目的語の間には Actor-Patient の関係が成り立っているが、*make* の場合は、二重目的語構文をとっても、この関係は保証されないのである。

さらに、岸本(2001: 135-138)によれば、この違いは動詞の意味構造の違いとも関係する。

⁸ 派生名詞の LCS を項として代入する操作に伴い、*give* と *kiss* の項の同定が必要である。埋め込まれた LCS 内に同定されないで残る項があると解釈に支障を来すからである。この場合は AFF において 2 つの項が同定されることで、自動的に上段の Thematic Tier 内の項も適切に同定されると考えられる。

⁹ 意味場の変更は軽動詞構文でなくとも、動詞の多義性の説明において一般に用いられている (cf. Jackendoff 1990: 25)。

¹⁰ Jackendoff (1990)では Actor-Patient 関係が受益か被害かを明確にするため AFF に±の値がふられており、*give* には+がふられているが、軽動詞としての用法においてはこの値は共起する派生名詞の意味によって変化すると考えられる。実際、*give* 軽動詞構文が表す意味には受益か被害かについての制約はない。

彼によれば、to-与格構文と交替する二重目的語構文は、何かを移動させることにより、相手がそれを所有するようになるということを表すのに対して、for-与格交替する二重目的語構文は、「主語が何かを作って、相手にあげる」という意味が基本である。つまり、give では、所有権の「移動」が意味の中心にあるのに対して、make においては、二重目的語構文においてもあくまで本義の「作成」が中心にあると言える。この点では Jackendoff(1990: 196)も共通の見解をとっており、make の LCS としては作成の意味のみを記述し、間接目的語は Action Tier の AFF の第 2 項としてしか記載されていない。この考えに従えば、間接目的語の意味役割も性質が異なり、give にとっての間接目的語は移動の「着点」として必須の要素だが、make においては、「着点」としては認識されず、「意図された受益者(Intended Beneficiary)」と呼ばれるような役割を担うと考えられる。

では、二重目的語構文を作る場合と受益者を for 句で表す場合とでは、make の意味はどのように異なるのだろうか。岸本(2001: 137-138)によれば、for-与格構文と交替するタイプでも二重目的語構文を作る場合には、間接目的語が作られたものの所有者と見込まれるという点では give と共通している。したがって、たとえば、(22a)では、Mary がサンドイッチを受け取ることが含意され得るが、(22b)ではそのような可能性はないので、容認されないという(岸本(2001: 138))。しかし、Mary が必ず受取人となるかといえ、先述の通り、そのように主語が意図しているというだけであって、その保証はない。このような側面を捉えて、Jackendoff(1990: 196)も、make タイプの動詞の二重目的語構文においては、直接目的語に表される物体が間接目的語に表される相手にとって有益なものと思われていると考えている。これに対して、for 句をとる構文¹¹においては、そのような含意がなく、make の LCS からではなく、for 句が共起することによって適用される「付加詞規則(Adjunct Rule)」によって受益者としての解釈は導かれるとされている。彼に従い、for 句が付加詞だとすれば、主語が為す行為全体が相手にとって有益なものと思われていると考えてよいだろう。

(22) a. John fixed Mary sandwiches.

b. *John fixed Mary the radiator.

以上の観察に基づき、make の LCS を(23)のように仮定する。

- (23) a. make1 :
$$\left[\begin{array}{l} [x_i \text{ ACT}] \text{ CAUSE } [\text{BECOME } [y_j, \text{ BE } ([\text{AT-EXISTENT}])]] \\ \text{AFF } [x_i] \end{array} \right] \Rightarrow x \text{ make } y$$
- b. make2:
$$\left[\begin{array}{l} [x_i \text{ ACT}] \text{ CAUSE } [\text{BECOME } [y_j, \text{ BE } ([\text{AT-EXISTENT}])]] \\ \text{FOR } [z_k, \text{ BE } [\text{WITH } y_j]] \\ \text{FOR } [\text{AFF } [y_j, z_k]] \end{array} \right] \Rightarrow x \text{ make } z y$$

(23a)では、make が基本的には対象の作成を表すことしか記述されていない。先述のように、

¹¹ Jackendoff(1990: 192)は make タイプの動詞と共起する for 句は付加詞であって、この構文を「for-与格構文」と呼ぶのは不適切だと述べている。

for 句をとる構文では付加詞規則によって for に後続する名詞句が受益者としての解釈が導かれる。いっぽう、二重目的語構文を作る make2 の LCS (23b)では、作成の意味に加えて間接目的語における作成物の所有と受益 (Action Tier によって表示) が意図されていることが目的を表す FOR による 2 つの修飾部で表されている。これらの LCS と派生名詞とが合成することによって make 軽動詞構文の意味構造と項の現れ方が決定されると仮定し、2 節で指摘した問題を考えてみよう。まず、give の場合は、他動詞からの派生名詞をとる場合、その Patient に当たる項を軽動詞構文でも Patient としての役割を保証するために、give2 の LCS(19b)が用いられ、(24a)=(16b))の構文となると説明した。いっぽう、make の場合は、(23b) の LCS では Patient の役割を表すことが保証できないため、二重目的語構文は作れない(cf. (24b))。その結果(23a)の LCS の方が用いられ、派生名詞の項はすべて(24c,d,e)のような形でそれぞれの意味役割を表す前置詞句として名詞句内に現れるのである。このような形式は、真の意味での「軽動詞構文」とは言えない。なぜなら、(23a)の LCS における y として派生名詞の LCS が代入されているだけであり、複雑述語が構成されているとは言い難いからである。¹²以上が第 2、第 4 の問題についての答えとして考えられる。

(24) a. Bill gave the dog a kick.

b. *John made a bag a grab. (cf. John made a grab at the bag.)

c. John always makes [an exact estimate of the time].

d. John made [an inspection of the premises]. (Cattell 1984: 6)

e. Nancy made [an approach to the bank]. (ibid.:47)

最後に第 3 の問題、すなわち、(8b)のように make 軽動詞構文が二重目的語構文となり得るのはどのような場合であるかについて考えよう。Cattell (1984: 45)は、まず、(25)(26)((8)(9)(10)を再掲) のようなコントラストを示し、二重目的語構文となるのは、派生名詞が二重目的語構文を作る動詞を基体とする場合に限られると述べている。(27)に示すように、基体動詞の補部が着点である場合でも、インフォーマントの判断では二重目的語構文には現れにくい。さらに、Cattell は、必ずしもその逆は成り立たないことも示し、sale, bet, award, grant などについては、(28)のように、対応する動詞が二重目的語構文を許すのに、make 軽動詞構文では許されない場合もあると述べている。

(25) a. Harry made an offer of money to the police.

b. Harry made the police an offer of money. (Cattell 1984:31)

c. Harry offered the police money. (ibid.: 45)

(26) a. Bill made a confession of his infidelity to his wife.

b. *Bill made his wife a confession of his infidelity.

c. *Bill confessed his wife his infidelity. (cf. Bill confessed his fidelity to his wife.)

¹² これは、たとえば、本来的に名詞である bargain を目的語とする “make a bargain with him over the price” (価格について彼と契約する)のような表現と同様で、目的語が行為を表す名詞であるということである。

(ibid.: 45)

- (27) a. Nancy made an approach to the bank.
b. *Nancy made the bank an approach. (cf. Nancy approached the bank.)
- (28) a. Paul made a consignment of rubber ducks to Jim.
b. *Paul made Jim a consignment of rubber ducks.
c. Paul consigned Jim some rubber ducks. (ibid.: 57)
- (29) a. They make annual awards to outstanding young researchers.
*They make them annual awards.

(28)の *consign* については、筆者の調査では基体動詞においても二重目的語構文は容認されにくいようだが、確かに基体動詞が二重目的語構文を作る物であっても *make* 軽動詞構文では間接目的語をとれない派生名詞は存在するし、Cattell が述べている(25)と(28)の違いについての見解は参考になる。彼によれば、それぞれの基体動詞において、(25a)では、間接目的語が受け取るのは主語の行為であるのに対して、(28a)においては、目的語に表されている物体だというのである。この見解を踏まえて、(23b)の *LCS* と(30)のように仮定される *offer* と *sale* の *LCS* が合成するとどうなるかを考えてみよう。上記の分析に従えば、軽動詞構文において、*make* の目的語 *y* 項は派生名詞が表す行為である。したがって、(23b)において間接目的語が受け取るものは、行為ということになる。この点で派生名詞の *LCS* と合致するものでなければこの *LCS* との合成はできないと考えれば、Cattell が指摘した事実が正しく予測されることになる。

- (30) a. *offer* : $\left[\begin{array}{l} [x_i \text{ ACT ON } y_j] \text{ (CAUSE [GO}_{\text{Poss}} [y_j, [\text{Path TO } z_k]]]) \\ \text{FOR [AFF } [[x_i \text{ ACT ON } y_j], z_j]] \end{array} \right]$
- b. *sale*: $\left[\begin{array}{l} [x_i \text{ ACT ON } y_j] \text{ CAUSE [GO}_{\text{Poss}} [y_j, [\text{Path FROM } x_i \text{ TO } z_k]]] \\ \text{AFF } [x_j, z_k] \end{array} \right]$
- (31) *make* [him]_k [an offer]_m:
- $$\left[\begin{array}{l} [x_i \text{ ACT}] \text{ CAUSE [BECOME } [[x_i \text{ ACT ON } y_j]_m \text{ BE([AT-EXISTENT])}] \\ \text{FOR } [z_k, \text{ BE [WITH } w_m]] \\ \text{FOR [AFF } [w_m, z_k]] \end{array} \right]$$

Cattell も述べているように、*offer* には、必ずしも対象が相手に受け取られるという含意がないので、(30a)では、結果事象を括弧内に入れてその随意性を示している。また、修飾部では、相手に提供されようとしているのは、対象そのものではなく行為であるという Cattell の観察にもとづき、*AFF* の第1項には行為を表す *LCS* が埋め込まれており、*make2* と同様に、この受益も保証されたものではなく主語の意図にすぎないことが *FOR* によって表されている。このように考えると、*offer* と *make2* の *Action Tier* のスキーマは合致しているため、合成には問題がない。(30a)が(23b)の目的語に当たる *y* に代入された軽動詞構文の概念構造は(31)のようになる。いっぽう、*sale* の場合は、必ず対象が相手に受け取られることが含意されるため、*LCS* は(30b)のように表される。この *LCS* において、相手 *z* はあくまでも対象 *y*

を受け取る着点 (TO の項) である。make2 の LCS を用いると、この z が着点としての解釈を受ける保証はない。したがって、sale の場合は、二重目的語構文に現れることができず、make1 の方が用いられると考えられる。

4. おわりに

以上、派生名詞の項を間接目的語とする二重目的語構文と、前置詞句で表す構文と、どちらが容認されるかがいかに決定されるかといった問題に対して、主動詞と派生名詞の LCS を構造に従い構成的に合成することで軽動詞構文の概念構造を導く分析をとることで、適切な説明が与えられることを示した。ところで、(5b)や(25b)では、派生名詞がとる項のうち動作主と着点に当たる項は主動詞の項として表され、対象は派生名詞を修飾する of 句として表されている。このように派生名詞の項が、名詞句内と外とに分かれて具現されるという現象は、日本語の「軽動詞構文」と呼ばれる(32)のような文でも見られる。

(32) a. 少年が村人に[オオカミが来るとの警告]_{NP}をした。

b. 警察は参考人から[事情の聴取]_{NP}をした。(影山 1993:276)

日本語の「軽動詞構文」における項の具現については、Grimshaw and Mester (1988)以来、様々な分析が提案されてきたが、すべて項構造による説明であった。本稿で提案した LCS を用いた分析を日本語の「軽動詞構文」にも適用することにより新たな観点からの説明を導き出せる可能性があるのではないかと考える。今後の課題としたい。

参考文献

- 天川豊子 (2000) 「英語の軽動詞構文について」『言語研究』118, 29-54.
- Cattell, Ray (1984) *Syntax and Semantics 17: Composite Predicates in English*, Academic Press, Sydney.
- Grimshaw, Jane and Armin Mester (1988) "Light Verbs and θ -Marking," *LI* 19, 205-232.
- 日高俊夫 (2007) 「Give a~の意味構造と生成過程」『英米文学』51(2), 47-61, 関西学院大学.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』研究社, 東京.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jespersen, Otto (1909-49) *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part VI*. George Allen & Unwin, London.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社, 東京.
- 岸本秀樹 (2001) 「二重目的語構文」『日英対照: 動詞の意味と構文』影山太郎(編), 127-153, 大修館書店, 東京
- Roeper, Thomas (1987) "Implicit Arguments and the Head-Complement Relation," *LI* 18, 267-310.
- 由本陽子 (準備中) 「英語の軽動詞構文における項の具現化—give を主動詞とする構文についての一考察」